

黒白の対立を主題とする愛の悲劇

——「オセロウ」の一考察——

小 島 信 之

シェイクスピアの劇に「主題」を発見することがこんにち流行しているが、想定された主題を強調しすぎると、もつと重要な事柄を曖昧にぼかしてしまふ危険がある。——と、リドレイは警告し、しかしながら、もし「オセロウ」の主題は何かと問われるならば、「理性対本能」(Reason versus Instinct)と答えるであろう、と述べている。即ち、彼によれば、「オセロウは本能に信頼する時は殆んどいつでも正しい。(“If she be false, oh then Heaven mocks itself. I'll not believe it.” 『ああ、あの女が不義をする、もしそうだつたら、神は自らを欺いているのだ。おれはそんなことは信じないぞ。』 3. 3. 278—279) しかし、彼が考えている時、或は考えていると、自分で空想している時には殆んど常に誤っているし、しかもその誤りは破滅的である」というわけである。

しかし、「理性対本能」の悲劇的乖離という主題は、何も「オセロウ」に限つたものではなく、凡そオセロウとは対蹠的な人物

であるハムレットの場合にできえ同様の現象が起つていたのである。即ち、ハムレットは、亡霊と直接相對しているときは本能的に亡き父と感じて振舞つていたのであるが、後になつて理性的に判断すると、「あれはおれの憂鬱に附け込んで悪魔がおれを誘惑して破滅させようと仮装しているのかも知れない」などと迷い出すのである。また、跪いて祈つているクローディアスを刺そうと背後から忍び寄つた時、「いま殺すと天国へ送ることになつて復讐にはならない」と思い返し、劍を鞘に納めて立ち去るのであるが、その時のクローディアスの魂の状態が天国へ行くのにふさわしいものでなかつたことは彼の独白によつて明らかである。このようにしてハムレットも正しい直覚を判断によつて誤り、復讐を引き延ばすという破滅的な結果を招くのである。オセロウの場合はこの過程が非常に神速に行われているというにすぎない。したがつて「理性対本能」という主題は、決して「オセロウ」に特徴的なものであるということとはできない。

何よりも先づ「オセロウ」の主題は恋愛である。その美しい調和を破壊しようとするイアーゴオの邪悪な意志の介入によつて愛が憎に変わる。そして最後には再び元の調和へと戻るのであるが、その時、両主人公にはもはやこの世における生存は許されてはいなかつたのである。したがつて、「オセロウ」の主題は「愛対憎」といつた方が、「理性対本能」よりも、もつと包括的であり、また、この悲劇の特徴をよく捉えているといえるであろう。しかし、これだけでも決して主題の充分な規定であるとはいえない。

リドレイによると、シェイクスピアの劇はイプセンのようにかある主題を劇の形で提供したのではないという²。しかし、近來シェイクスピアに主題を求めようとする傾向が強いのは、近代劇の立場からシェイクスピアを眺めようとする態度によるのであろうか。そういう立場もあるかも知れない。しかし、むしろ逆に、近代の心理学の適用によつて、作中人物一人一人の、所謂「性格」の解釈に焦点が向けられた結果、一つの渾然として纏つた、そして、一つの大きな主題が交響樂的に奏でられている、元の「詩劇」の本来の姿が見失われるようになったのを、主題の発見によつて再び元へ戻そうとする復元運動の現れである場合が多いのである。何か一つの根元的な真実が語られており、それが様々な登場人物、環境、事件を通じて、ちやうど現実の人生さながら無限に豊富で多彩なヴァリエティーによつて表現されている。所謂「性格」は現実の人間のそれのように興味深く、尽きない謎を秘めている。しかし、それはその劇全体の、しかもその特殊な context の中の、一要素に過ぎないのである。しかし、また、こ

のことは、シェイクスピアの劇が、^{アレクシイ・コルツォフ・アレクシイ・メロドラン}寓話や道徳劇や勸善懲惡劇であるというのではない。それらの粗い布目はシェイクスピアの芸術以前のものである。しかし、またそれらの伝統がシェイクスピアにおいて完全に否定されているということもできない。

ベッセルは、「オセロウ」に夥しくばらまかれている diabolic images (悪魔的表象) の追求によつて、そこに、「善と悪との間の古くからの斗い」という形而上の次元における劇が、家庭内の卑近な場面においても生まなましく演じられているのを見た³。確かに「オセロウ」の根本主題は「善と悪との斗い」である。しかし、それは他の諸悲劇にも共通する窮極の主題なのであつて、それがこの悲劇の場合にどのような特殊な形相において現れているかが問題であろう。

先に「愛対憎」といつた。愛は結合し、憎は分離する。愛は新しい生を孕み、憎は反対に生を破壊する。ウィルソン・ナイトは、この悲劇において、両主人公の愛がいかに天上的幸福と宇宙的秩序として表現されているか、またそれが、天国を地獄に、秩序を渾沌に変えようとするイアーゴオの悪魔的、破壊的力によつていかに浸蝕され、崩壊していくかを、詩の韻律と表象との変化を辿つて捉えた⁴。

イアーゴオの動機は、直接には、オセロウがキャシオウを副官に任命したために、昇進への望みを断たれたことによるオセロウへの憎悪である。しかしイアーゴオの言行にはこのような人間的動機を遙かに超えたものがある。彼を純粹に人間の埒内において解釈しようとする試みは、ブラッドレイ以来繰り返されられてきたけれども、^{the motive-hunting of a} コールリッチの所謂

motiveless malignity (動機のない悪意の動機探し) の「動機のない悪意」には、人間的性格構造の中にはどうしても納まり切れないものが残るのである。そこには確かに、ベッセルやウイルソン・ナイトが洞察したように、悪魔的な意志が働いている。それが「マクベス」の場合には、魔女を通じて、王位の篡奪という野心を燃え上らせることによつて、国家の秩序の破壊へと駆り立てるのであるが、この場合には、イアーゴオを通じて、オセロウに「思慮分別では押え切れないほど猛烈な邪推を起させる (2.1.310-311)」ことによつて、同じような秩序の破壊を、恋愛 (或は夫婦愛) の場において目指しているとみることが出来る。注目すべきは、何れの場合においても、主人公自身に秩序の崩壊が同時に起つているのであり、したがつて、主人公個人の悲劇と見ることもできるといふことである。「オセロウ」の場合、理性によつて見事に統一されていた主人公の崇高な人格は、邪推——ついに最も下等な嫉妬の激情によつて圧倒され、"O, blood, blood, blood!" (3.3.451) と叫び出し、口から泡を吹いて野獣のように地上に横転するまでに没落する。この面からみると、この悲劇は Reason versus passion (理性対激情) という主題の迫真力漲る展開でもある。

このようにして、所謂「主題」は様々な面から、或は広く、或は狭く、人びとの解釈や視点に応じて見出され、単一な、まさに「オセロウ」が「オセロウ」である所以の独自の主題を設定することは非常に困難であり、また危険な業でもある。しかし、私はここに敢てその冒険を犯してみたい。

「オセロウ」が「愛」を主題とする悲劇であることはいうまでもない。しかし、「ロミオとジュリエット」も愛の悲劇である。では特に「オセロウ」的なものとは何であろうか。私はこれを「黒白の対立」に見出す。即ち、この劇は「黒白の対立を主題とする愛の悲劇」であると思う。

オセロウの顔が煤のように黒く、デズデモオナの肌が雪よりも白いは今更断るまでもなく、この劇の最も顕著な特徴であった。しかし、両主人公の皮膚の色の黒白の対立は、この劇の中では、単なる人種問題というような自然の現象を超えた、いわば象徴としての深い意味を与えられているのである。

Her name, that was as fresh

As Dian's visage, is now begrimed and black

As mine own face. (3. 3. 386—387)

(月の面のように白く清らかであつた彼女の名が、今は煤で汚れて真つ黒になつて、ちようどおれの顔のようだ。)

即ち、黒いのは単にオセロウの顔の色だけではない。真つ白であつたデズデモオナもまた、オセロウの心の中で黒く——しかも、彼の顔のように真つ黒に変つているのである。もちろん、デズデモオナの肌そのものは昔変わらず「雪よりも白い」 ("Whiter skin of hers than snow" 5.3.4) 問題はひとえに魂の状態である。イアーゴオは、

I will turn her virtue into pitch, (2. 3. 366)

(彼女の真つ白い貞潔を真つ黒に変えてやる)

というのだが、さすがの彼もデズデモオナ自身を墮落させること

はできなかつた。それで、オセロウの眼に、彼女が真つ黒に見えるようにしてやろうと秘術の限りを尽すのである。白を黒に変えることが彼の眞の動機である。

Divinity of hell !

When devils will the blackest sins put on,

They do suggest at first with heavenly shows,

As I do now. (2. 3. 355—358)

(地獄の秘伝だ！ 悪魔が真つ黒つけな大罪を人間にやらせようとする時には、先づ天使のような美しい姿を装つて誘惑するのだ、ちようどおれが今やつているように。)

右で明かなように、黒 (black) とはシェイクスピアの当時、悪や、罪 (vice, sin) の色であり、また邪悪 (evil)、地獄 (Hell)、悪魔 (devil)、醜 (foul)、闇 (darkness)、死 (death)、渾沌 (chaos, disorder)、不協和 (discordance)、憎悪 (hate)、悪人 (villain)、野獸 (beast) 等の色でもあつた。これに対して白は、善や、徳 (goodness, virtue)、正義 (justice)、天国 (Heaven)、神 (God) の色であり、また、美 (fair)、光 (light)、生 (life) 秩序 (cosmos, order)、調和 (harmony)、愛 (love)、聖人 (saint)、天使 (angel) 等の色でもあつた。かくして貞潔の美德は白く、邪淫の悪徳は黒い。白は美しく、黒は醜い。(第二幕第一場二二九—一六一行でイアゴオが、美しい女と醜い女、賢い女と愚かな女とをそれぞれ組合せて冗談を言つている場合、white はいつの間にか fair に black はいつの間にか foul になつている。) 日本でも美人の条件としては色が白くなくてはな

らないといわれる。それはまた単に外面だけでなく、「心の美しい人」、「腹黒い人」、「美德」、「醜行」、「潔白」、「黒白を決める」というように、正・邪、善・悪という倫理上の価値の象徴として用いられる。西洋の天国に対するものは極楽浄土であるが、そこは清らかな白光に遍く照らされているのではなからうか。少くとも「白法」とは善根功德の法である。そして、地獄は明かに暗黒の闇である。このように、黒と白との色の用法が東西軌を一にしているのは面白い現象であるが、そこには人間性に深く根ざした理由があるのである。扱、要するに、シェイクスピアにあつては、中世以来のキリスト教の伝統が根強く生きていて、白は天上的な色、黒は悪魔的な色であつた。

イアゴオは、白を黒に変えようとする意志である。即ち、彼は美 (Fair) を醜 (Foul) に変えようとするのであるが、この時、連想されるのは、

Fair is foul, and foul is fair (Macbeth, 1.1.13)

という、「マクベス」の魔女の合唱である。これは、悪魔のものの言い方が曖昧で両義的であることの見本みたいであり、このような惑わしい表現によつて、彼等は人間を巧みに黒・白、美・醜善・悪の見境のつかない領域へ誘い込んでいくのであるが、この場合の眞の意味は、(神にとつて) 美しいものは(悪魔にとつて) 醜く、(神にとつて) 醜いものは、(悪魔にとつて) 美しい、ということであり、そして、また、この一句は、神にとつて美しいものを醜に変えることが、彼等の仕事である、という悪魔の信条を語つているのである。

ところで、イアーゴ自身は、先の彼の独白にも明らかなように天使のような美しい姿を装っている。彼は周囲の誰からも、率直で、正直で、誠実(即ち honest)な人間と思ひ込まれており、皆から厚く信頼されている。「オセロウ」の原本であるチンテイオの「百話」では、彼は「美男子」とされている。シェイクスピアの意図も恐らく同じであつたであらう。)彼の妻エミリアでさえ最後の瞬間まで彼がその美名とはうらはらの大悪党だとは想像もしていなかつたくらい彼の仮装は完璧であつた。「天使のような美しい姿をして人を誘惑する」という「地獄の秘伝」を得意気に述べた時の彼は、酒に弱いキヤシオウを泥酔させ、一騒動を起させたのが原因でキヤシオウが副官を誡になつた後で、今度は誠しやかに復職のとりなしをデズデモウナに、その侍女である彼の妻エミリアを通じて頼んでやると申し出て大いに感謝された直後なのであつた。しかもエミリアはデズデモウナに向つて、「うちの人も、ほんとうに自分のことのように心配しておりますのでございますよ」と語るが、これは決して嘘を吐いていゝのではない。そして、デズデモウナは、「O, that's an honest fellow!」(「まあ、ほんとうに誠意ある人ね」3.3.31)と心から感心する。オセロウがイアーゴオの誘惑に乗つて彼女の身に覚えのない邪推を起して彼女をさんざん責め苛んだとき、デズデモウナは思ひ余つてイアーゴオに助けを求めると彼を信頼し続ける。イアーゴオはこのように、彼の真つ黒な内心を真つ白であると人びとに思ひ込ませている。彼は開幕早々、薄野呂の神土で、デズデモウナに岡惚れしているロダリーゴオに向つて、彼の内心を長々と

披露するが、その中で、

Heaven is my judge, not I for love and duty,

But seeming so, for my peculiar end : (1.1.59—60)

(神さまも照覧あれ、だ。あいつに尊敬しますの、義務を尽しますの、といつたつて、ただ外面だけそう見せかけておいて、実はおれ自身の利益を追つてゐるのさ。)

といい、最後に、

I am not what I am. (1.1.65)

という特徴ある科白で語を結んでゐる。即ち、「眼に見えてゐるこの自分ほんとうの自分ではないのだ」というのである。この言い方は正しく、「I am that I am」という、モーゼに現れた神の言葉の裏つ返しである。作者がこのことを意識しないでイアーゴオにこのような言い方をさせてゐるとはとうてい考えられない。

「外面だけそう見せかける」(“Seeming so”)と云ふ“heavenly show”を装うというイアーゴオ的偽善者の精神はハムレットの最も嫌悪したところであつた。seeming と being との間の深い亀裂の発見こそ、ハムレットを自殺の思ひにまで駆り立てるほどの悲劇的なシヨックであつた。seem と be というこの二つの言葉の使い方が二人にとつてどんなに違つてゐることか。ナイオビーのように泣きぬれて父の野辺送りをした母の涙が世にも偽りの涙であつたとは！その父の死後僅か一月もたたないのに父の弟と野獣にも劣る再婚をした母——美しい seeming (外見)の下に潜んでゐる醜い being (内実)、その母が再婚の披露宴で、一人黒

い外套を着て浮かぬ顔をしているハムレットに向つて、「この世の常である人の死というものが、

Why seems it so particular with you?

(どうしてお前にだけそんなに変つて見えるのだろうか?)

と問いかけた時、それまで鬱積していた彼の思いが堰を切つて迸り出た。

seems, madam! nay, it is, I know not 'seems'.

(見える、お母さん！ちがいます、真実なんです。私は「見える」なんていうことは知りません。)

續けて、彼の着ている真つ黒い外套、その他様々な悲しみを現わす形式、方法、外觀等は、彼の気持をほんとうに現わすわけにはいかない、といい、外側に見える現象の世界に現われようのない内部の真実について語る、――

these indeed seem,

For they are actions that a man might play,

But I have that within which passeth show,

These but the trappings and the suits of woe. (Hamlet, 1. 2. 75—86).

(こういうものこそ全くの外見です。そうしたものは人がお芝居のできる仕草なのです。けれども私の内部には見せかけを超えた真実があります。今いつたものは、要するに悲しみの飾り、その衣にすぎません。)

ハムレットとイアーゴオと、この二つの精神を比較すると、前者は seeming や show を超えた、眼には見えない深い内部の being に生か、後者は seeming や show を最高度に活用して

人眼を瞞着し、天才的な演技によつて自分を心底の誠実な男と見せかけ、自分自身だけの利益を追求するばかりでなく、更に進んで、seeming の底を洞察し得ない人間の弱点を利用して、白を黒、美を醜と見せかけ、地獄の底へ曳きずり込もうと常に網を張つているのである。

ハムレットが母の涙を見たとき、それは真実美しく見えたのであつた。それが単なる外見だけの軽薄な涙にすぎなかつたことは、母が再婚して始めて分つたのである。しかし、ハムレットは自殺の思いに堪えながら雄々しく生きていく。オセロウは、

If it were now to die,

'Twere now to be most happy. (2. 1. 191—192)

(いつそ死ぬなら今がいちばん幸福な時であろう)

という程の「充ち足りた」外見と内実との見事な一致の後で、その乖離に関する恐ろしい疑惑に見舞われるのである。不貞な妻の外見と、誠実なイアーゴオの外見と、何れの内実が一致しているのか。この二者択一の前に一瞬彼は躊躇う。そして忽ち、イアーゴオを白と断定することによつて妻を黒と決定してしまふ。「眼に見える証拠」(ocular proof)さえ提供されたがためであつた。実はその証拠も単なる seeming の領域内のものにすぎなかつたのであるが……かくして彼は seeming 操徒の達人イアーゴオの魔法の杖によつて踊らされ、「火の海の深みへ逆落しに」没落していくのである。

では、イアーゴオは、どのようにしてその魔法の杖を揮うであろうか。

キャシオウがデズデモオナに復職のとりなしを頼んでいた時、オセロウが来たと聞いて、心怖じて慌てて立去る。その後姿を見ながら、イアーゴオは

Ha! I like not that. (3.3.34)

(おや、あれは怪しからん。)

と呟く。これが誘惑の始まりである。オセロウが「今家内と別れて行つたのはキャシオウではなかつたか？」と尋ねると、「いや、そんな筈はないでしょう。あの人なら、閣下がおいでになるのを見たからといって、悪いことをしたみたいに、あんなにこそ逃げ去っていくわけはありません」と、キャシオウに対する疑念を起させようとする。もともとオセロウという人物は、

(The Moor) is of a free and open nature,

That thinks men honest that but seem to be so,

And will as tenderly be led by the nose

As asses are. (1.1.405—408)

(好人物でおうような性質で、人びとが見かけさえ正直そうなら真実正直だと思ひ込むほう)で、イアーゴオにとつては、(驢馬みたいにやすやすと鼻面擱んで曳き廻せる)

といった、単純で善良な男である。即ち、オセロウは今まで、デズデモウナはもちろんのこと、イアーゴオもキャシオウも見かけどりの honest な人物だと信じ切つてきたのである。このうち、イアーゴオだけが例外であつたが、彼は、前述のように万人から honest そのものと見られていたのであるから、この点でオセロウに短見の責を負わせることはできない。アルバート・ジェ

ラードは、副官になりそこねた恨みをイアーゴオが抱いているくらいに分りそうなもの、といつてオセロウの愚を嘲り、彼を低能扱いするのであるが、そのような恨みからあのような悪事を働く人間ではないということこそ、イアーゴオがオセロウに対して与えてきた印象なのである。またその恨みが真の動機であつたのなら、最後にオセロウが、皆に向つて、

demand that demi-devil

Why he hath thus ensnared my soul and body ?

(5.2.301—302)

(その半悪魔に、どうしてこれほどまでにわたしの魂も身もわなに掛けおつたかをお問い糾して下さい)

と要求したとき、

Demand me nothing : what you know, you know :

From this time forth I never speak word. (5.2.303—304)

(問い訊かれるのなんか御免だ。知つていただけのことはお前が知つている筈だ。たつた今から先き俺はもう二度と口はきかない)

などとは答えない筈である。したがつてブラッドレイのように、その恨みを晴らそうとして、自分でも思いがけない運命に操られ、予期しない大変な結果を招いてしまつたのだから、この悲劇はイアーゴオの悲劇でもある、というのは、確かに見当違いである。

さて、イアーゴオは、オセロウの善良な眼に映つている「正直な」人間が、内実はそうでないという方向に彼の視線を操つてい

く。それはちようど、ヴェニス^の国敵、トルコ^の艦隊がローヅ島へ押し寄せていくと見せかけて、サイプラス島へ向つていたあの欺瞞^の戦略である。因に、トルコはキリスト教国ヴェニスを襲う夷狄である。キリスト教国対異教国との戦争は大嵐のため敵艦の全滅によつて呆気なく終つたが、今度は内部の戦いが、イアーゴオという demi-devil 兼マキアヴェリによつて巧みな偽装の下に進められ、オセロウの精神にあの大嵐にそつくりの、天地が逆転するような大混乱を生ぜしめようとしているのである。

...tis a pageant, To keep us false gaze. (1.3.18—19)

(あれは見せびらかしなのです、われわれの視線を間違つた方向へ向けるための)

と、元老院の一議官が見破つたのと同じ手をイアーゴオも使つてゐる。

Iago. For Michael Cassio,

I dare be sworn I think that he is honest.

Oth. I think so too.

Iago. Men should be what they seem.

Or those that be not, would they might seem none !

Oth. Certain, men should be what they seem.

Iago. Why, then, I think Cassio's an honest man.

Oth. Nay, yet there's more in this :

I prithee, speak to me as to thy thinkings... (3.3.124—

131)

(イアーゴオ。マイクル・キャシオウさんにつきましては、

確に請合つて申し上げますが、正直な人物だと思います。

オセロウ。おれもそう思う。

イアーゴオ。人間はすべて見かけどおりであるべきだと思ひますな。そうでない連中は正直そうな顔に見えなければいいのですが！

オセロウ。確かに、人間は見かけどおりであるべきだ。

イアーゴオ。それなら、むろんキャシオウさんも正直な人でございましょう。

オセロウ。いや、まだ何かある。なあ、腹の底に持つていることを、打ち割つて話してくれないか、どんな怪しからん考えでも、飾らずにそのとうりいつてくれ。

ここまで誘い出せばもうしめたものである。

Look to your wife ; observe her well with Cassio. (3.

3.197)

(奥さまによく眼をおつけなさい。キャシオウといつしよの時をよく注意してごらんなさい。)

まさに当初ブラバンシオが言つたとうりのことをイアーゴオも繰り返す。

Look to her, Moor, if thou hast eyes to see :

She has deceived her father, and may thee. (1.3.293—

294)

(ムーア、お前さんも眼があるのなら、よく眼をつけるがいぞ、その女は父親を瞞したのだから、お前さんも瞞すだらうからな)

Show を超える眼に見えない真実の奥所から、眼に見える欺瞞に
充ちた seeming の領域へといかに巧みにイアーゴオは相手を曳
きずつていづくか。

She did deceive her father, marrying you,

And when she seem'd to shake and fear your looks,

She loved them most. (3.3.206—208)

(奥さまはお父さんを欺してあなたと結婚なさつたんです
よ。そうして閣下のお顔を見て怖がつて震えていられるよう
に見えていたときがその実はいちばん愛しておられたという
わけですからな。)

これに対して、「And so did」。 (そのとうりだつた) とオセロウ
は答えないわけにいかない。また、オセロウはヴェニスの女の風
儀については何も知らなかつたのだが、イアーゴオによつて、
「火遊びはたとい神様には知れても、亭主にだけは見つかりたく
ないというほうで、そのいちばんましな良心というのが、やらな
いのです」というのでなく、ただ、やつて知られないようにして
おくだけのこと (202—204)」といつた飛んでもない種類のもの
であるという新知識を得る。(ヴェニスの女の不行跡は当時のイ
ギリスにおいて事実著名であつた。) しかし、デズデモウナは「ヴ
ェニスの女」としては例外であつた。そして彼女が父親を欺した
のは、まさにオセロウをそれだけ熱烈に愛したためではなかつ
たか。

Iago. Why, go to then ;

She that, so young, could give out such a seeming,

To seal her father's eyes up close as oak—

He thought 'twas witchcraft—but I am much to blame ;

I humbly do beseech you of your pardon

For too much loving you.

Oth. I am bound to thee for ever. (3.3.208—

213)

(イアーゴオ。ね、そういうわけなんです。あんなにお若く
て、あんな見せかけがお出来になる。それもお父さんの眼を
鷹の眼を塞ぐように真暗闇にして——お父さんの方では、だ
から魔術だと思つておられたが——いや、どうも少々云いす
ぎました。どうぞ御勘弁下さい。あんまり閣下のことを思つ
ておりましたので。)

オセロウ。お前の厚意は永久に忘れないよ。)

オセロウの眼を真暗闇に塞ぐよう魔術をしかけているのはイアー
ゴオである。彼は更に残酷無情に決定的なわなを投げる。

Othello. And yet, how nature erring from itself,—

Iago. Ay, there's the point : as—to be bold with you—

Not to affect many proposed matches

Of her own clime, complexion, and degree,

Whereto we see: in all things nature tends—

Foh ! one may smell in such a will most rank,

Foul disproportion, thoughts unnatural. (3.3.227—233)

オセロウ。しかし、どうして自然の情に背つて、——
イアーゴオ。そう、そこですな。つまり、——遠慮なく申

しますと——いづくも申し込みがあつたのを断わつていら
る、自分と同じ国の、顔の色も家柄も同じ男からの奴を。誰
にしろこいつは受けようというのが自然ですのに——チェ
ッ、誰だつて気がつきませすな、こりや不純な気持が働いて
る、とんでもない不釣合だし、不自然な考え方だし。)

毒は充分に廻つた。オセロウは反省し始める。

This fellow's of exceeding honesty,
And knows all qualities, with a learned spirit,
Of human dealings.....

Haply, for *I am black*

And have not those soft parts of conversation
That chamberers have, or for I am declined
Into the vale of years, —yet that's not much—
She's gone. I am abused ; and my relief
Must be to loathe her. ... (3.3.258—268)

(あいつは非常に誠実な男だ。それに世馴れておつて、世態
人情を知り尽している。.....
恐らくおれの色が黒くて、やさ男どものような上品な応待が
出来んので、或はまたおれの年令がもう傾きかけてきたの
で——といつても大したことはないのだが——あいつはおれ
を棄てたのだ。おれは恥を掻かされた。おれの救いは、あ
いつを憎んでやることだ。)

だが、なかなか信じられない。イアーゴオに向つて、

By the world,

I think my wife be honest and think she is not ;

I think that thou art just and think thou art not.

I'll have some proof. (3.3.383—386)

(実際、おれはおれの妻が潔白な筈だと思つて、又いやそ
うではないと考える。お前は正直な奴だと思つて、すぐまた違
うと考える。どうしても何か証拠が欲しい。)

ハンケチという証拠が提出されて、ついにイアーゴオは勝利を
収める。このように彼は魔法の杖を揮つて、*Seming* の世界に
pageant を演出し、相手の眼を巧みに自分の思う方向に導いて
いつ、そこに *being* とは正反対の映像を、当の対象の上に、相
手が鮮かに見て取るようにしてしまふ。

Was this fair paper, this most goodly book,

Made to write 'whore' upon ? (4.2.71—72)

(この純白な紙、この最も美しい本は、その上に「淫婦」と
書き誌すために作られたのであつたか?)

嫉妬の情念に煽られ、「真つ黒な復讐」(“*black vengeance*”
3.3.446)を誓う時、オセロウの魂は、その顔と同じように悪魔
的な漆黒の色に塗り潰されているのである。いよいよ妻を殺そう
と手に蠟燭の火を持って近づいていく。

Put out the light, and then put out the light :

(5.2.7)

(この灯を消して、それからあの《生命の》火を消してやる
のだ)

二重に消された火——それこそ後の暗黒さはいかばかりであろう

か。そして、彼の顔が真つ黒であるために、その暗黒さはいよいよ極限にまで達している。しかし、それこそ、オセロウが陥入らなければならなかつた地獄の烏羽玉の闇であつた。ついに、彼が「その心臓を納めていたデズデモウナの胸、彼の生命も死もそこに懸けていたその胸、彼の生命の川が流れるのも枯れるのもそこに懸けていたその生命の泉」(“there, where I have garner'd up my heart, Where either I must live, or bear no life :

The fountain from the which my current runs, Or else dries up” ; 4.2.57—60) を自らの手で枯らし、死に追いやつた時、(それは既に自殺と一致する仕業であつた) その時になつて、ようやく、イアーゴオが、「忠実な奴隸なんか鞭で引つぱたいてやる」(“Whip me such honest knaves. 1.1.49) といつた正にその、デズデモウナの「忠実な奴隸」であり、彼女の女主人と同じように夫の手に掛つて殉死していく、エミリアを通して真理の光が輝き出してゐる。

Oh. She's like a liar, gone to burning hell :

‘Twas I that kill'd her.

Emil. O, the more angel she,

And you the blacker devil ! (5.2.129—131)

(オセロウ、嘘つきめ、燃える地獄へ墮ちたぞ。殺したのはおれた。
エミリア、ええ、ぢや、ますます奥様は天使です。それに

較べて旦那様はいよいよ悪い悪魔だ！)

右はデズデモウナが一度「墓石のように静か」になつた後で、ま

るで死から蘇えつたかのように吐いた最後の言葉、

Nobody ; I myself. Farewell :

Commend me to my kind lord : Farewell ! [Dies.

(誰でもない、わたしがしたの。さよなら。旦那様さまによろしく申上げてね、さよなら！「死ぬ」)

に続くものであるが、このデズデモウナの最後の言葉をハイルマンは次のように解釈している。「ここに入人性の完成があり、私はそれを奇蹟と呼ぶ。この適切な劇の形式は、自然界においては「復活」という明かな奇蹟である。ここに、デズデモウナが、最後の言葉を告げに死から蘇えつてくる超現実的な正しさを人が感じる所以がある。それは彼女の愛の形而上学的性格の表現派的象徴である。それは精神の勝利である。エロスによつて錯乱した世界におけるアガペの体験である。」

私はこの解釈に賛意と敬意を表する。エミリアが更に、

O, she was heavenly true ! (5.2.135)

(おお、あの方は神様のように真実でした！)

というのを聞くとき、また、かつて泣くことを知らなかつたオセロウが「今度ばかりは眼もくらんで、アラビヤのゴムの樹が樹液を流すようにちんちんと泣き」ながる(“Albeit unused to the melting mood, Drop tears as fast as the Arabian trees Their medical gum.” 5.2.349—350)

O ill-starr'd wench !

Pale as thy smock ! when we shall meet at compt,

This look of thine will hurl my soul from heaven,

And fends will snatch at it. Cold, cold, my girl!

Even like thy chastity. O cursed slave!

Whip me, ye devils,

From the possession of this heavenly sight! (5.2.

272—278)

(ああ、不運な子であつた！下著のように蒼白い顔をして！最後の審判の日にお前と会つたら、そのお前の顔を見ただけで、おれの魂は天から投げ落されて地獄の鬼どもにもさぼり食われるだろう。冷たい、氷のようだ、なあ、おい！ お前の操もこんなに澄み切つていたのだなあ。ええ、あの呪われた奴隷(イアーゴオのこと)め！地獄の鬼よ、おれを鞭で引つばたいで、追いやつてくれ、この神のような姿の見えない処まで！)

と、叫ぶのを聞くとき、デズデモウナの白さが、単なる皮膚の色
の白さでなく、天上の美に輝く、純粹な愛の発する魂の色の象徴
となつて、氣が附くのである。それに対して、イアー
ゴオの誘惑に屈服する前のオセロウの外見は悪魔的な真つ黒¹⁰で
こそあつたが、デズデモオナが、

I saw Othello's visage in his mind, (1.3.253)

(私はオセロウ様のお顔をそのお心に見たのです)

といつたとうり、その内実は、無垢の純白に輝いていたのであつたことに間違ひはない。魂が魂に見入つたのであつた。ブラッド
リーの言葉を借りれば、「彼女の魂はこの地上で最も崇高な魂に
出会つたのであつたH。」

しかし、その魂が後になつて、あのように真つ黒に煤けてしま
おうとは、いつたいどうしたわけであつたらう。デズデモウナは
あまりにも清らかな、ロマンティックな恋の裡に、オセロウの
心を、「この地上で最も崇高な魂」と錯覚したのであるらうか。
“deception”——と、そのように彼女の恋を規定する人もいる¹²。

しかし、もし、そうだとしたなら、嫉妬に狂つたオセロウが公衆
の面前で彼女を打擲しながら、“Devil!”(悪魔め！4.1.251)と
罵つた時、「そんな方とは知りませんでした」と言つて、愛想を
尽かした筈である。しかし、彼女は、どんな酷い目にあつても、
「今だつて、これ迄だつて、これから先だつて、いつでも——た
といあの方からみぢめに振り棄てられようと、——私はあの方
を心底から愛し続けます。」(“I do not yet, and ever did,
And ever will—though he do shake me off To beggarly
divorcement—love him dearly, 4.2.156—158)と跪いて神に
誓うのである。

ではオセロウの愛が不完全であつたのか。そのように解釈する
評家も多い。しかし、

Excellent wretch! Perdition catch my soul,

But I do love thee! and when I love thee not,

Chaos is come again. (3.3.89—91)

(可愛い奴だ！ おれがお前を愛さないようになつたら、破
滅よ、おれの魂を捕えよ、そして、おれがお前を愛さないよ
うになりでもしたら、原始の渾沌が又やつて来るのだ。)

とは、イアーゴオの誘惑が始まる直前の彼の心の姿である。そし

て、実際にその言葉どうりの結果になつたのであつた。彼の陥入つた渾沌が凄まじいものであればある程それは彼の愛の大きさを証明するものではあるまいか。

ド・ヴァー・ウイルソンによると、一九三六年にモスコウから次のような報告が届いたそうである。即ち、偉大な俳優 Ostuzhev が、オセロウの最後の科白の 'bloody period' (ロウトヴィーコウの言葉で、オセロウがその最後の科白を言い終つて自らを剣で刺した直後に云われたもの、即ち、「血の終止符」の意)に達したとき、観客の一人である鋳夫が大声で叫んだ、「それは彼の罪ではないのだ。彼の愛のような大きな愛は一つの都会を焼き払つてしまえる程なんだ!」と。

そしてド・ヴァー・ウイルソンは次のように附け加えてい
る。——

「この反響はきつとシェイクスピアを喜ばしたに違いない。」
註

1' "The New Arden *Othello*", Ed. M. R. Ridley, (London, 1958), Introduction, Pp Iiv-Iv.

2' *Ibid.*

3' S.L. Bethell, "Shakespeare's Imagery: The Diabolic Images in *Othello*", in *Shakespeare Survey* 5, Ed. Allardyce Nicoll, (Cambridge, 1952), Pp. 62-80.

4' G. Wilson Knight, "The *Othello* music", in *The Wheel of Fire* (London, 1949), Pp. 97-119.

5' オセロウの皮膚の色については、本文中の明白な言及にも

拘らず、今日なお諸説紛々として一定してゐない。しかし、既に五十年前ブラッドリイは精密な論証によつてオセロウがニグロ人種であることを断定している。ニグロであるかどうかはともかく、色が石炭のように黒いアフリカ人であることに私は同意する。しかし、この問題については別に詳細な論究が必要である。紙数の関係で省略した。

9' Albert Gerard, "Egregiously an Ass", *The Dark Side of the Moor. A View of Othello's Mind*, in *Shakespeare Survey* 10 (Cambridge, 1957), p.99.

7' A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London, 1952, 1st ed., 1904), Pp. 207-237

8' Robert B. Heilman, "Magic in the Web. Action and Languages in *Othello*" (Lexington, 1956), p.216.

6' エズモウナが神的な愛の体現者であるかのよびな heavenly images は本文中に夥しう。例へば divine Desdemona (2.1.73), she's full of most blessed condition (2.1.254-255), She is indeed perfection (2.3.28), virtuous Desdemona (2.3.336)等。

10' 開幕早々のイヤー・トキの old black ram (1.1.88), devil (91), ロタリー・トキの a lascivious moor (127), O thou foul thief に始まるトランプ・トキの悪口雑言 (1.2.62-81)等はすべてオセロオの眞黒な色が、好色な野獣、悪魔そのもの、或は悪魔の妖術を使う外道の象徴として彼等によつて用

いられていることを明示している。その diabolic な黒色が
法廷にも似た元老院の場面で、眞実は單なる皮膚の色にすぎ
ず、彼の魂が崇高な美に輝いていることが判明した後、太公
がブラバンシヨオに向つていう次の言葉は、客観的にオセロ
ウの外見と内実の相違を宣言したものである。

If virtue no delighted beauty lack,

Your son-in-law is far more fair than black.

(1.3.290-291)

11' Bradley, *Op. cit.*, p.202

12' Allardyce Nicoll, *Shakespeare* (London, 1952), p.144.

13' "The New Shakespeare, *Othello*" Ed. Alice Walker
and John Dover Wilson (Cambridge, 1957), Intro-
ductin, p Iv.